

日本看護協会「アワード2021」

訪問看護はまなす

釧路

業務効率化で奨励賞

社会医療法人孝仁会が運営する釧路市の訪問看護ステーションはまなすが、日本看護協会（東京）主催の看護業務効率化の先進事例「アワード2021」で奨励賞を受賞した。情報通信技術（ICT）を活用し、釧路から約140km離れた根室市の出張所も一元管理。看護師の勤怠管理や業務による明細書計算などを効率化することで、根室市に2力所だけの訪問看護の拠点を守っている。

（相川康暁）



日本看護協会は19年度から、看護の効率化によって医療・看護サービスを充実させた取り組みを表彰している。21年度は全国44施設の応募があり、はまなすを含む9施設が受賞した。釧路・根室管内では唯一。

根室の出張所は13年、訪問看護ステーション根室として開設。20年1月に職員の退職で看護師が2人に。本来3人必要だが、はまなすの出張所とすることで存続が決まっ

効率化に活用したパソコンを前に、「アワード2021」のトロフィーを持つ川上さん

スマホなど活用 出張所一元管理

た。現在釧路で7人、根室で2人の看護師が常勤しており、釧路の川上所長（43）が根室の管理者も兼ね、週1回は根室へ通う。

従来は釧路、根室の看護師がそれぞれ1日数軒の在宅患者の訪問後、手書きで看護記録を付けていた。川上さんは「事務所に帰って記録を付けていたため、移動や記録に時間が取られていた」と振り返る。

はまなすではコロナ禍による国の交付金を活用し、スマートフォンとノートパソコンを看護師に1台ずつ配備。看護記録をオンライン入力できるソフトも導入し、出先で記録が付けられ、手書きの負担はなくなった。勤怠管理や明細書計算も簡略化。オンライン会議システムZoom（ズーム）の活用で、根室の取り組みを釧路で簡単に把握できるようにもなった。

川上さんは「事務作業が軽減し、看護業務により専念できるようになった。看護の現場は人手不足の傾向だが、これからも地域の医療を守りたい」と話している。